

【19】“戦後”という言葉はもう止めよう！

年輩者、大体 60 歳以上の方々は、ものを書くとき、よく“戦後”という言葉を使います。

1945 年（昭和 20 年）の敗戦により、日本の政治、社会、人々の暮らしから文化に到るまで全てにわたり、革命ともいえるべき大変化がもたらされたので、時間的、歴史的な物言いをするとき“戦後”が使われてきました。

年輩者は何気なく使っていて別に不思議とも思わないのですが、改めて考えてみますと戦後も今年で 79 年を迎え、いくら何でも長すぎますし、そもそも“戦後派”の若い人たちには実感がありません。

明治維新が 1868 年で、敗戦まで 77 年間（喜寿に相当）続いた、いわば“第一期近代日本”を通していう用語というところ、”戦前”くらいしか思い当たりませんが、これはせいぜい昭和の 20 年間と大正の 15 年間くらいのことを云うようです。

明治時代のことは“御維新後”などと言ったのでしょうか、調査不足でよくわかりません。

“戦後”がズルズルと 80 年近くも使われている理由は、新憲法による民主主義体制の下、下地をなすアメリカの影響も続いていて、日本という国の基本的な在り方が全く変化しなかったことが挙げられると思います。

大きな転換点というところ、戦前の記憶を引きずって来た昭和の終わりでしょう。

昭和天皇の亡くなられた 1989 年のことで、その数年後にはバブル崩壊があり、以来“失われた 30 年”が始まり、現在に至るまでその状況が続いています。

この時期を云うのに“昭和後”、“平成以来”、少々下品ですが、“バブル崩壊後”とか“ポストバブル”とか考えられますが、“戦後”に比べてどうも語呂が悪いようです。

オーラルヒストリーの導入で知られている政治学者の御厨貴先生も“戦後”の一言で時代をくくるには余りにも長すぎたと云われています。